



文苑

○漢詩

研究科生 竹田みち

驟雨 沛然白雨洗蒼苔  
月在東天照八垓

風伯驅雷般々來  
忽看雲霧涼如水

秋思 更深砌下草蟲悲  
無限感懷無限恨

送三妹倭子之彥根

倭子彥根去 涼風八月時  
郊晴秋氣遠 天闊雁行遲  
白日看將暮 湖山難可追  
江州如見月 千里相思

虛舟先生評 句々有古色可誦

寄三妹在彥根

雲蔽南天雁陣悠  
琵琶湖上煙波裏  
思君夜々夢江州  
髣髴浮船語三津修

鎌倉覽古

當時霸府地 不說草離々  
今日無殘礎 黃昏鳥雀悲

菊歌

菊兮菊兮 吾愛爾芬葩  
群芳已凋落 爾獨何開華  
菊兮菊兮 吾愛爾暉々  
三逕已就荒 爾獨何暉々  
清廉吾恥牡丹富 况又芍藥飾綺繡  
菊兮菊兮 吾愛爾清節  
風霜方凜烈 爾獨何皜潔

虛舟先生評 篇々皆可誦、而以送妹倭子詩、爲壓卷、蓋友于之情切至、不用雕繪、自然感人者歟、

國文

函嶺紀行

文科四年 鹽川 國

七月拾貳日 晴天

七時十五分發であるから六時に出發してもよいのだけれども嬉しいのではやくも五時五十分には出發してしまつた。春日町櫻田本郷町を經て新橋についたのは六時二十分。見まはして見ると仲間らしい人は見えない。はてはやすぎたかと思つてゐると小荷物預入所からひよつくりと大澤さん。お互ひにお天氣のよくなつた事を祝した。黒いつゝみと犬はりの包を手にしてをられた。談話をしてゐるとむかうから金田、本田の兩人が見えた、我等のをるのを一向御存知ない。次が岡田さん尾台さん初鹿野さん田中さんの順であつた。一同たゞ嬉々として笑んでゐるのみ。昨日の豪雨がかくも今日の快晴を齎すとは思はなかつたとはみんなの第一の挨拶であつた。田邊さん見送りに來らる。多謝々々。

番の後殿は西村先生であつた。白い洋服に寫眞機をかけ後より尻尾を出してゐられた。よく見たらそれはハンマーの柄であつた。湯本までの往復切符(壹圓七十錢十四日間通用)を求めて國府津行に乗つた。客は少ない。汽車は奇麗である。いづれもうれしい。田邊氏は汽車中まで荷物運搬。實に高等赤帽であつた。七時十五分ゆる／＼とごき出した。新聞を見はじめた。やがてあきた。車外を見るこれも熟知の道とて面白くない。

「會計係をきめませう。どうぞ東京のかたね」と云ふ聲が聞える。やがて定まるべき運命をもつ身、いやだ／＼と反抗して見ても面白くないと思つたので初鹿野さんと二人その任を引うけた。實に大藏大臣兼小使なのであつた。七時四十分さしあたり三圓づゝ徴集合計二拾七圓、白い木綿で作つた袋に大切におさめて初鹿野さん保管。國府津についた。即ち汽車をすて、國府津館に休んだ。そこで辨當を取りよせ名々肩に擔つてゆく。湯本行の電車が來た。止め